

園田尚弘先生をお送りするに際して

佐久間 正

園田先生を送るに際して去来する思いをいくつか記してみます。

私が長崎大学教養部に赴任した時に同僚となった文系の諸先生は、ここ数年の間に相継いで退職され、園田先生をこの3月でお送りすると、当時の私の同僚であり先輩であった先生は本学部から姿を消すことになります。一つの時代が終わったという思いを強くします。

園田先生をはじめ人文学系の先生にはいくつかの共通点があったように思います。その一つは、それぞれの専門領域の研究に自閉することなく、狭い専門領域の枠を超えて長崎に深く関わった研究も進めた点です。園田先生の専門はドイツ文学ですが、それにとどまらず、幕末・維新期に長崎にもたらされた外国の辞書や長崎で作成された辞書、また明治初期に長崎で発行されていた新聞に関する研究を進められました。近年、特に若い研究者の間では、狭い研究領域に自閉する傾向が強くなってきた感じがしますが、長崎という人文学の研究者にとってはなかなか興味深い地であって、長崎に関する研究を進めることは長崎大学に対する地域の皆さんの期待に応えることでもあるような気がします。私たちが環境科学部に移籍してからは、先生は主として都市の文化環境についてお教えになりました。確かそれとの関連だった気がします。元禄・享保期の対馬藩の儒者雨森芳洲に関して質問を受けました。雨森芳洲は、近年では朝鮮語の対訳辞書を早い時期に編纂した人物として広く知られるようになり、先生は朝鮮半島やハングルにも深い関心をお持ちでしたから、それに関する質問かと最初思いましたが、先生の質問の内容は中国の都城に関するものだったと思います。

もう一つは、いずれの先生も大学教員にしばしば見られる社会に対する高踏的な態度ではなく社会的関心が旺盛であり、したがって大学のあり方について一家言を有していたように思います。現在では死語になった感のある「大学自治」のあり方について議論をしたことが懐かしく想起されますし、また現在本学において再び論点となっている「教養教育」のあり方についても随分議論を重ねました。その議論の中で、専門教育と教養教育を大学教育の両輪と捉え、専門教育に解消し得ない教養教育の独自性を＜対抗的相補性＞という概念で把握しようとした議論などは、今から振り返ってみても褪色していないように思います。

園田先生のご専門は前述のようにドイツ文学ですが、先生が深く研究されたベンヤミン等を考えると、思想史の研究者である私の印象では、むしろドイツ思想の研究者といった方が適切かもしれません。ベンヤミンは現代思想を考える上で論ずべき思想家の一人ですから、もっと先生とお話しすればよかったという思いを、先生を送るに際して強くしています。所用があって先生の研究室を訪れると、先生は多くの場合ソファに座って読書をしていました。4月からはこのような先生の姿を見ることができないと思うと、さびしさを覚えます。